

ほうまさ ノモンハンと方正で国際主義的精神を思う

——第3回「近現代史の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」報告記——

大類 善啓

一昨年、「友好の原点を訪ねる旅」を企画したところ大好評だった。昨年に続き今年で3回目の「近現代史の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」では、8月19日から26日まで、北京からハイラル、ノモンハン、チチハル、大慶、方正を訪ねた。普通のツアーではなかなか行けない地域でもあり、また近年、ノモンハンが脚光を浴びていることもあってか、応募者は「方正友好交流の会」の会員や前回の参加者などを含めて、瞬く間に当初の定員をオーバー、参加をお断りした人も出た。最終的には事務局を含めて総勢35名の訪中団である。

ドラマを秘めた人たち

センターの理事・矢島敬二さんも昨年同様参加。団長もお願いした。同じく前回も参加された理事の服部健治さんは、中央大学大学院の教授、中国駐在11年、中国経済の専門家であり、旅の間は参加者へ丁寧な解説もしていただき、大いに勉強になった。今回は副団長を務めていただいた。

また日中関係研究所の会員で、中国軍事問題の専門家である拓殖大学名誉教授の茅原郁生さんや、ノモンハンで叔父や、母の許婚を亡くされた方。中国南部の戦線で人を殺めたことを忘れるため毎晩浴びるように酒を飲み、58歳で逝った父を思う人。満州からシベリアに送られた兄を持つ女性、満州にいた日本人に嫁ぎ、白城子からチチハルに新婚旅行に行かれた婦人、チチハルの宮前小学校を卒業後、満鉄チチハル支社に勤めた方など、それぞれ深い想いとドラマを秘めた人たち、そして日中両国の歴史に真摯に立ち向かおうとする人たちが参加者である。

ノモンハンで「国境」を思う

8月20日の朝、北京からハイラル空港に降り立つ。うだるような蒸し暑さの日本から来た者には、ひんやりとした空気が心地よい。ノモンハンへ向う、舗装されていない道路を走るバスの車窓から見えるのは、た

だただ広漠たる大草原である。放牧の牛や馬、羊が時に見えるが、ほぼ同じ風景が延々と続く。

「国境？ そんなもんが海の上にあるものか。わたしは一度も見たことがないぞ」。伊集院静は近著『お父さんとオジさん』で、朝鮮から渡ってきた父を描いたが、その中に出てくる父の言葉が何かしら思い出される。「国境？ そんなもんがこの草原の上にあるものか」

しかし今から70年ほど前の1939年夏、モンゴルと“満洲国”との国境紛争は、ソ連軍に対する甘い認識と、辻政信を代表とする関東軍参謀たちの冒険主義的な性格も合わさり、二つの傀儡国家を挟んで、ソ連軍と日本軍の大規模な戦争へと発展した。結果は、壊滅的な損傷を受けて日本軍は敗北した。それから2年後、ノモンハン戦争の教訓を汲むことなく、日本は太平洋戦争に突入した。

中国もノモンハン戦争に研究のメス

今回ゲストとしてハイラルからノモンハンまで同行していただいた徐占江氏（ハルビン市ノモンハン戦争研究所所長、ハルビン市社会科学院侵華日軍要塞研究所所長）によれば、中国でも近年ノモンハン戦争を研究するようになったとのこと。以前は、ソ連、モンゴル、“満洲国”、そして日本の「4カ国」の立場からの調査研究だったが、これからはできるだけ多面的な角度から検証していきたいという。

ソ連が解体しロシアの機密資料が解禁され、ジュコフの暗号電報も解読できるようになり、今まで書かれていたのとは違う資料も出てきたという。ソ連も航空機や歩兵戦で思った以上に損失があり、ソ連軍の圧勝という定説と異なる面が浮かびあがってきたのだ。ソ連もモンゴルも大変だった、と徐所長は語った。

虚しさ迫る関東軍の冒険主義

この大草原で関東軍の兵士たちは、日本では想像もつかないような蚊の大群に悩まされた。私たちは、バスの接触事故もあり、代行車が来るまで2時間近くか

かり、結果的にはハイラルからノモンハンまで5時間ほどかかったが、当時の関東軍は完全軍装の徒歩で1週間かかったという。なぜこんな大草原までやってきて戦ったのか。思えば日本の指導者たちは、遙か遠い異郷の地に“国家”をつくり、モンゴルの大草原までやってきた。今更ながら軍の参謀や戦争指導者の愚かさを笑っても、虚しい。

今その激戦地だったここに、「愛国主義教育基地」としてノモンハン戦争遺跡陳列館が建っている。その手前には、当時のノモンハン戦争を偲ぶレリーフが作られていた。悪辣な侵略者である関東軍を打ち破ったソ連軍戦士の勇ましい姿が描かれている。現在の中国の立場を表しているのだろうか。

陳列館の中には、関東軍が残していった火炎瓶や兵士の眼鏡、鉄兜、三八式歩兵銃などがガラスケースに収まっている。

陳列館の外の草原には、ソ連の戦車BT-7が数台置かれている。当時の戦車とは思えず、くすんだ感じがしない。専門家である茅原郁生さんに聞けば、当時のソ連軍の戦車を模し、強化プラスチックなどで外装を施したのだろうとのことだった。叩いてみたら「コンコン」と音がしたという。

陳列館の正面前には「平和の鐘」がある。昨年作られたという。日本などからの旅行者を期待しているかのようにこの地は整備しつつあるようだ。

「憎しみ」を超えて国際主義的精神を！

ノモンハンを後にして、ホロンボイルの^{シンバルコサ}新巴爾虎左旗^キを經由し^{アムダロ}阿木古郎へ行き泊まった。翌日、ハイラルへ再度向かうなか、関東軍がノモンハン戦争の際に軍事拠点とした甘珠爾廟（カンジュル廟）を見学。また、関東軍が作った北山要塞跡も視察した。ここにも博物館が建っている。

先のノモンハン戦争遺跡博物館もそうだが、ここでも博物館のコンセプトになっているのは、「侵略の歴史を忘れるな」である。確かに忘れてはいけない。

しかし、1960年当時の陳毅副総理は、日本作家代表団の副団長として訪中した亀井勝一郎に、「日本軍国主義の弾圧を受け投獄された亀井先生が、日本軍国主義が中国を侵略したことを永久に忘れないとおっしゃる。私達は忘れたいと考えている。これは美談です。逆に私たちが忘れないと言い、日本側が忘れたいとい

うことになれば悲劇です」と語ったという。（「日中文化交流」NO.716より）この陳毅の言葉は今日、極めて重要だ。

一昨年訪れた瀋陽市郊外の、柳条湖事件を記念して作られた9・18歴史博物館は装いも新しくなり、そこには「我々は決して忘れない」というトーンで、展示物が構成されている。日本の残虐な行為だけを、これでもかこれでもかと陳列しているのだ。出口にあった参観者の感想メモノートには中国語で、「日本人は人間ではない！」と記されていた。ここには、歴史を鑑として未来に向かうという、次の世代への友好への志はない。

これでは、日本への憎しみを一方的に刻印するだけであり、その憎しみを超えて、国家に支配された人々との「新たな連帯への絆を創っていく」という発想が全く生まれてこない。新たな憎悪を作りだし、一方的に「日本人（全体）は憎い」という発想になってしまう。周恩来や陳毅たちが苦闘の末に辿りついた国際主義的な精神が全くないがしろにされている。新中国の崇高な精神はどこへ行ったのか、と思うのは私だけではないだろう。

方正で慰霊法要

4日目のチチハルでは、郊外の甘南県の朝陽山開拓民跡を訪ね、現地の方々と交流した。市内の宮前小学校跡は今、チチハル第三十四中学となっている。参加者の中で最年長、85歳の丸井保さんが出た学校だ。丸井さんは夫人のみどりさんと並んで、仲間からカメラのフラッシュを浴びた。丸井夫妻の眼には涙があった。もう一人、杉田春恵さん（83歳）は、白城子からチチハルの龍沙公園に新婚旅行で来たとのこと。お二人にとって65年ぶりのチチハルである。

大慶では、石油生産基地から加工基地へと変貌しつつある姿を確かめ、ハルビンを経て方正を訪ねた。

方正では、革命烈士記念碑に黙祷を捧げ、中日友好園林へ行き、日本人公墓に参拝した。高野山真言宗の住職、竹井成範氏がわざわざ慰霊法要のため、岡山から駆けつけてくれた。方正日本人公墓建立は、当時の陳毅外相の署名批准後、周恩来の下で許可された。先の陳毅の言葉が、公墓建立の思想的立脚点である国際主義的な精神とともに、改めて思い出されるのだ。

（社団常勤理事、方正友好交流の会事務局長）